

北欧の TEXTILE と COSTUME (7)

堀 田 延 子

Viking の名で西洋の歴史を大きく動かした北欧の人々は、その豊かな感性と精巧な技と強い忍耐力で特色ある1つの文化圏を形成している。北方ゲルマン系のデンマーク、スウェーデン、ノルウェーの人々も、フィンウォーグ語系フィン族のフィンランド人も北海、バルト海に接したあまり肥沃でない土地を基盤として、中・南欧や東欧・アジアの文化を吸収融合してきた。その初期は7C末に始まる海外進出であり、生活の必要性からより豊かな土地への侵入、掠奪、植民であった。ヴァイキングは掠奪者の代表のように恐れられたが、11C半ばにフランス、イギリスに公国（ノルマンディ公領、ノルマン朝）を築くと共に自国へのキリスト教導入、国家建設の完了などによって1つのまとまりを持つようになった。

ヴァイキングという行為によって早くから異文化に接してきた北欧の人々は、その後もひき続き西欧・東欧との交易を行うことにより新しい流行やデザイン、技法を受入れてきた。そして自分達を取り巻く厳しい自然環境の中でそれを熟成させてきた。高度の福祉国家の実現と工業国への成長が達せられた近世に、文化面でも生活必需品としての用と生活に潤いをもたらす美とが一体となった現代北欧芸術への発展となったのである。

Textile の technique (2)

工業国の仲間入りをしながらもなお手工芸の持つ温もりが日常生活の中に生き続けている北欧の Textile や Costume の調査、研究を続けてきた¹⁾。Textile の technique については(1)織物、(2)紐織、(3)染色、(4)フェルトを第6報で述べた。本報は(5)刺繍、(6)編物を検討する。

刺繍は織布を色糸で縫合したことが始まりといわれ、

主として衣類、インテリアなどへの装飾として用いられた。編物は物を結んで繋ぎとめてゆくことに始まり、経糸と緯糸を組合せる技法の織物より先に発見された技法であるといわれている。刺繍は中国、インド、シリアなどのオリエントで、編物はアラビア半島で発展した技法である。次いでエジプトへ伝えられ、地中海南岸、スペイン、イタリアへと順次広まってゆき、ヨーロッパ全域にひろまった。織物、編物、刺繍品のいづれにしても原料は羊毛、亜麻が主であり、後に綿、絹、金銀糸が使用されるようになった。そして原料から糸を紡ぐことにはじまり、数多くの工程を経た後にでき上るものであること、原料に限りがあることなどの理由で中世には宮廷や教会の権威の象徴とされて布地は大切に扱われた。

刺繍や編物には数多くのデザインや技法があるが、北欧でよく使用されるものを主に取上げた。そして多種多様のまとめ方があるが、本報では孔あき模様を作るものを lace として各項目内でまとめた。

(5) 刺繍 (embroidery)

刺繍の西洋における発展過程は次のようである。⁴⁾

古代ギリシャ人の綿・麻のキトンに多くの色糸刺繍が施された記述が残っているが、それより以前のB.C. 18~15Cにすでにバビロニア、アッシリアなどで高度な刺繍の技術が発達していたといわれている。ギリシャ、ローマ、ビザンチンの時代から11Cの十字軍遠征にいたるまで戦略品や交易品によって、インド、シリア、中国そしてロシアや東欧の影響のある北欧などの刺繍の技法、模様が西欧にもたらされた。羊毛や綿・麻・皮などが主であった10C頃より絹・金銀糸も使用されていた。自然の風物・動植物の具象柄が多かった。東方の珍品である刺繍品は皇帝や貴族の権威の象徴となった。

北欧ではヴァイキング時代（7C末～11C半ば）すでに羊毛糸の織物や刺繍品を西欧に輸出していた記述があり、独自の技法を持っていたようである。スウェーデンのビルカ、ゴトランド島、ノルウェーのオセベリなど北欧各所に残るヴァイキングの遺跡より発掘された多くの品物の中に、女性の使用していた鋏、ピンセット、裁縫箱、紡錘車なども沢山ある。そして装身具として衣服に着けていたブローチが酸化して、それに接していた部分の布も発掘されている。多分東欧を経て入ってきた中国の絹糸を用いたものや銀糸を縫い込んだ布があった。銀糸は針を用いず直接生地に刺し込み、小型のピンセットで引張ったものと思われる。

中世になりキリスト教の隆盛と共に、教会が中心となって十字架や聖書に関連あるモチーフを広めた。13C～16C頃まで続いた教会刺繍は英国が中心となった。オープス・アングリカーヌムといわれ、厚手の麻布に絹や金銀糸で刺し、宝石などを留めて豪華なものであった。刺繍が家庭婦人の手から専門職人の手仕事になった。

16～17C末にはルネサンスの時代を経て、衣服は明るく華美なものとなり、刺繍と宝石を組合せたり、ビロードや金襴に刺繍をした。教会のみでなく再び上流家庭も刺繍の中心となり、室内装飾にも使用されるようになった。モチーフも自由な題材がとり上げられた。またこの頃に国家権力を示すために祭礼用の晴着が生み出された。現在の folk costume の基礎ともなったが、刺繍や後述の編物が重要なアクセントとなっている。

18Cになると高い教養を表わす1つにフランスやイギリスが中心となり、上流階級の男性も女性も刺繍や編物をするようになったが、やがて趣味の変遷と織物技術の発達により刺繍は急速に衰退した。特に19～20C前半にかけて宗教改革、フランス革命、第一次大戦などにより、今までの教会や宮廷の權威がなくなったことと、産業革命による大量生産の波に押され刺繍は衰退するばかりであった。しかし一般庶民の間では産業革命で綿をはじめ多種類の布地が入手しやすくなったので、刺繍は家庭の手芸として普及していった。

19C後半、イギリスのウィリアム・モーリスの提唱をはじめとする伝統手工芸保護運動が各地に起り、手工芸協会が設立された。現在では協会が中心となって隆盛期の刺繍は民俗芸術として保持、愛好されている。

北欧においては、ヴァイキング時代以来、西欧と毛皮、コハク、羊毛、麻の織物を輸出し食糧や綿布など

を輸入することで交易が続いていたので、西欧の風潮は絶えずもたらされていた。教会の十字架やオランダで流行したバラの花のモチーフ、キャンバス地の目数を追って刺してゆくクロスステッチ、ハーダンガー刺繍などがコスチュームやタピストリーに表現された。また、北欧は地理的に遠隔地だったため、産業革命の波を直接受けなかったので手工芸は絶滅しなかった。

（但し、デンマークは例外である¹⁾）しかし、民族意識の高揚が基となって伝統工芸保存運動が起った。1875年フィンランド、1899年スウェーデン、1907年デンマーク、1918年ノルウェーに手工芸協会が設立された。更に1930～50年に有志により、自然消滅していた技法の再興がおこなわれ、現在は日常生活にも芸術表現にも数多い技法とデザインを存分に駆使している。

（イ）自由刺繍

色糸のステッチ（刺し目）で図柄を表現してゆく方法である。ステッチの種類は非常に多く、平らに仕上がるもの（アウトラインステッチ、チェーンステッチ etc）、表面がもり上って量感のであるもの（フレンチナッツ、芯入りサテンステッチ etc）があり、直線も曲線も方向も自由に絵を描くように刺繍してゆける。

図1—①はベッドカバーである。黒地に白、赤、緑の色糸によって、星や十字や方形がサテン、シャドウのステッチで表わされている。織物によるベッドカバーの多い北欧では珍しい作品であるが、19C東南フィンランドのものである。

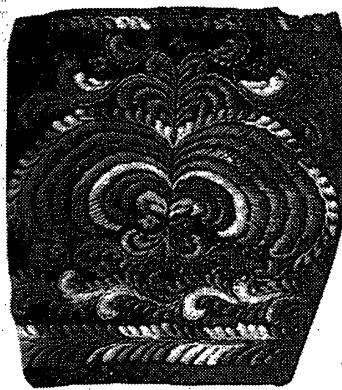
②はサテンステッチによるコスチュームの一部分である。黒地に染色された羊毛糸で刺されているので光沢があり鮮明で量感があって、晴着らしい装飾となっている。オランダで流行したバラのモチーフがサテンステッチで刺繍されたのをはじめ、南ノルウェー、デンマーク、スウェーデン、南西フィンランドでは花のモチーフが多くみられる。

③はサテン織の布地に麻糸と木綿糸で刺繍されたクッションの一部分である。チェーン、ダブルノットなどのステッチにより描かれたこのモチーフは中央に生命の木や花が配され、右にイヴの創造、左に楽園からの追放の物語を表わしている。これは西欧に古くからある構図である。1814年南スウェーデンのスコーネで製作されたものであるが、17C末イギリスで盛んに流行していたジャコビアン・エンプロイダリーの構図のとり方でもあり、麻布地の上に自由な刺繍をする技法である。

④のように金銀糸を使用することが多いのは教会や上流階級の衣服、室内装飾であった。現在でも一般の



① 刺繡による
ベッドカバー
(タンペレ博物館)
フィンランド



② サテンステッチ²⁾



③ クッションの一部分³⁾

図1 自由刺繡

間にはあまり使用されていない。④は教会の祭壇用掛布を金糸を用いて制作している。金銀糸は伸縮性が少なく布への貫通性もあまり良好でないので熟練を要する。

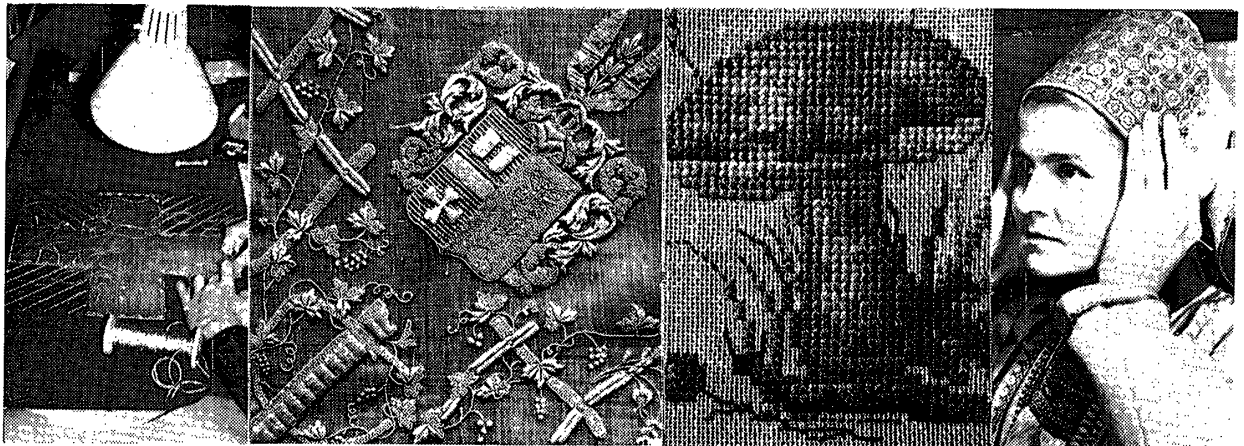
⑤は薄手麻布に白綿糸で刺繡されたハンカチーフの隅である。芯を入れて量感を出したサテンやノット、シャドゥ、ボタンホールなどのステッチで貴族の紋章などを表わして華麗な雰囲気をかもし出している。このように白布に白糸で刺す白糸刺繡は17C頃のルネサンス後の自由闊達な世相の表われで、次に述べる区限刺繡に比べて柄も布地も自由を選べるので大いにもてはやされた。当時西欧では、イタリアやフランス製のレースが流行していた。しかし北欧では高価なレース

を輸入することは贅沢であると控えられていた。そのレースに代るものとして、白糸刺繡は麻の布地を薄手にしたり粗く網目のように変化させ、精巧な技法を駆使して工夫をこらした肩かけ、縁かざり、教会用布などに作られた。教会や上流階級のみが使用した。

(ロ) 区限刺繡

布の織目(経糸又は緯糸の本数)を数えて糸を渡しながら柄を作ってゆく。水平、垂直、斜めにも進めるが自由刺繡と異なり常に織目の方形が基準となるのでなめらかな曲線は表現し難い。

区限刺繡の代表は図2-①のようなクロスステッチである。①はデンマークの現代作品であるが、糸の色を濃淡に巧みに使い分けることにより、写実的な表現を工夫している。本来クロスステッチは技法的にみると世界最古の装飾ステッチであり、世界中に発見することのできる技法である。特に麻布が織り出された時、



④ 金糸刺繡
(フレンド社)
フィンランド

⑤ 白糸刺繡³⁾

① クロスステッチ

② 赤糸刺繡

図2 区限刺繡

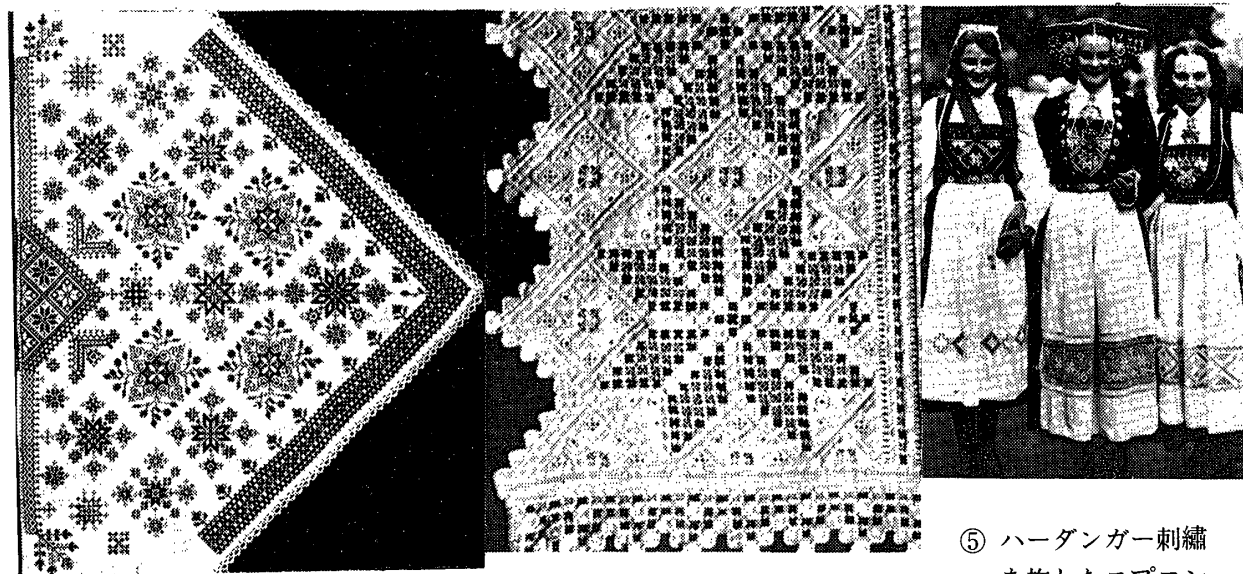
織目数を数えて刺すこの技法が同じ頃に生じたと考えられる。インド、近東、南東ヨーロッパに古い優れた作品が残っている。技法も簡単であり、糸の量が最も少なくすむ経済的な技法なので主に農村で盛んに行われた。

木綿の布や糸が大量に生産され、誰でも入手しやすくなった頃（17C以降）から薄手の麻の白糸刺繍に変わって綿布への綿、麻の色糸によるクロスステッチが盛んとなった。白糸刺繍や従来からのクロスステッチのモチーフが使われて、ブラウス、エプロン、ショール、ピロケース、テーブルクロスなどに広範囲の用途となった。綿布への刺繍がなされるようになって、長い間、権力誇示の象徴となっていた装飾刺繍が一般化したのである。

綿布へのクロスステッチのはじまりは②の如き、赤糸刺繍であった。最初は麻糸を赤に染色したものを使

用したが、後に綿糸を使用するようになった。②は東南フィンランドからソ連領カレリア地方に多い赤糸によるクロスステッチである。ギリシャ正教派（ロシアのキリスト教宗派）の女性のベッドドレスである。上衣の衿、ブラウスの胸にも施されている。北欧の中でも特にこの地方に赤糸による刺繍や織物が多く生産された。モチーフは卍、八角形の星型、ハート型、交差文などが多く、東欧やロシア方面の影響によるものである。

③は綿布への黒糸によるクロスステッチである。家具おおいや儀式、教会に行く時の晴着などのショール、ハンカチーフ、ヘッドスカーフなどに黒糸刺繍は使用された。北欧各地でみられるがスウェーデン中部ダーラナやノルウェーでは盛んであった。特にノルウェー北西部ソグン地方では白糸と組合せた黒糸刺繍を使った特有の習慣が残っている。（図3—②を参照）



③ 黒糸刺繍²⁾

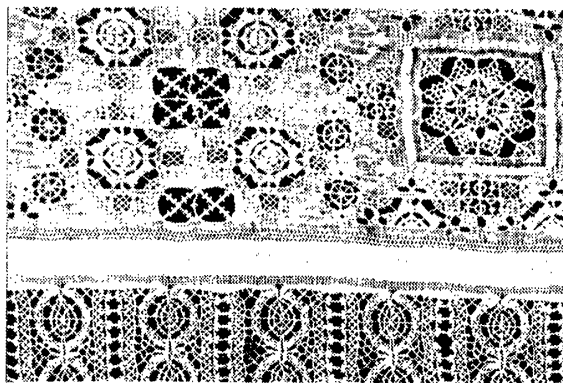
④ ハーダンガー刺繍²⁾

⑤ ハーダンガー刺繍を施したエプロン

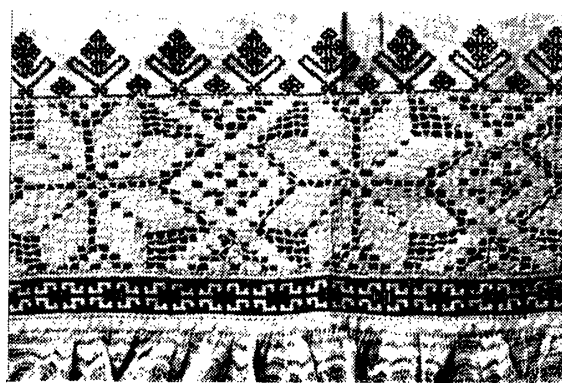
④はハーダンガー刺繍である。北西ノルウェーのハーダンガー地方ではじまった。綿布に刺繍をおこなうようになった頃、考案されたと思われる。地理的に隣地との隔りが大きいノルウェーでは各地域特有のモチーフや技法が生まれたり伝承される傾向が強いが、特に陸地内に大きく切込んだハーダンガーフィヨルドのあるこの地方で生み出され、練磨された技法が世界的に愛好されることとなったのである。目数を数えやすい2本織の綿キャンバス地に、かなり太い綿糸又は麻糸で方形の幾何学的模様のサテンステッチと織糸をたて、よこに技き取ってかがってできた正方形の連続す

るカットワークの組合せである。全体の柄のモチーフには④の如き八角形の星型が多い。仕事着にも晴着にも家具やベッドのカバー、縁飾りなど利用範囲が広い。⑤はハーダンガー刺繍をエプロンに施した女性達で、中央は花嫁である。北欧の女性は大きなチェストに少女の頃より自分で作った織物や衣類を貯めてゆき、結婚する時に持ってゆく。その中には勿論、ハーダンガー刺繍による作品が沢山入っている。

現在スウェーデン刺繍の名称で親まれているステッチも織目を数えて、水平、垂直に糸を渡してゆく区限刺繍である。色糸を濃淡に取合わせ、ぼかし柄になる



① カットワークとレティツェラ²⁾
(上) (下)



② ダブルドラゴンワーク²⁾

図3 レース

幾何学模様を描くことに特徴がある。

(ハ) レース

レースは繊細な透かし模様の布である。この項では刺繍より発展したレースという意で基布に穴のあくレースの技法をとり上げた。レースはカットワークとラシーの2通りの刺繍から、16Cに発達したものであるといわれている。ラシーとは4角形や菱形の目の手編みネットにネットと同じ麻糸で模様を1目毎にかがり縫いしたものである。中世の頃、ドイツで盛んであったが13C末のものがイギリスに現存する。

図3—①はカットワークとレティツェラである。レティツェラはイタリアのニードルポイントの技法で、刺繍とレースの境にあるものといえる。15~17Cのカットワークの1つで主にベニスから起ったといわれている。①の布は西北ノルウェー、ソグンの教会の祭壇掛布(17Cのもの)の縁である。基布を切りとり、ボ

タンホールステッチで穴のまわりをかがったカットワークの部分と、橋渡しした糸にボタンホールステッチを行って透し模様を作っているレティツェラが合わさっている。

②は基布のたて糸もよこ糸も抜いてかかっているダブルドラゴンワークである。棒かがりで方眼が作られ、その方眼にたて、よこに糸を渡してダブルクロスや星型を描き出している。上下の黒い部分は、黒糸によるクロスステッチと単純な刺し方のホルペインステッチである。西ノルウェーのソグンのものである。(白糸刺繍の項を参照)

(ニ) ビーズ刺繍

図4はスウェーデン南部スコーネで1845年に製作された婦人服の衿飾りである。ドイツの流行が北欧に入ったものである。これは糸に通したビーズを1つ1つ布に留めてゆく技法で、文化の発達した社会での方法



図4 ビーズ刺繍



図5 メタルワーク

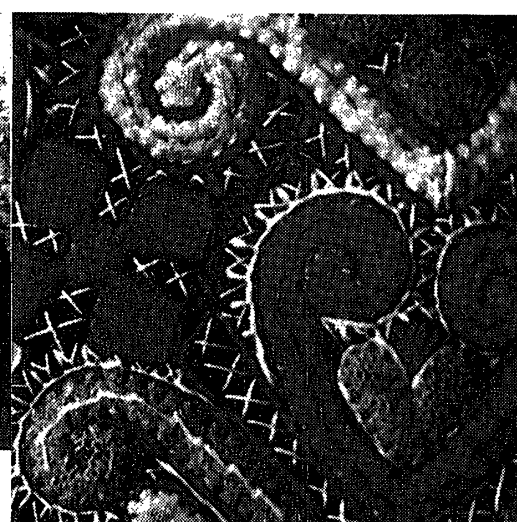


図6 アプリケ

であるといわれている。中世にはスペインやドイツで宝石の代用として盛んに行われた。衣服の衿や裾、袖口だけでなく、クッションにしたりした。17Cのイギリスはビーズによる刺繍絵が大変好まれた。

他にビーズワークとして、現在グリーンランドにみられる技法がある。ビーズを糸に通しておいて、その糸を編物のように組んで大きな衿飾りを作っている。この技法はアフリカ南部やボルネオ、北米インディアン、エスキモーなどの民族が伝えている技法である。グリーンランドへは多分北米からの移動者によりもたらされたものと思われる。

(ホ) メタルワーク

メタルワークはヴァイキング時代に既に盛んであった。前述の如くヴァイキングの墳墓の発掘品の中には、沢山のボタン、留め具や腕輪などの装身具がある。ヴァイキング時代の衣服の着装は、体型衣でなくおそらく貫頭衣や大きい布をそのまま巻いたものと考えられる。着装した時、随所に金属製のブローチや留め具を使って衣服をとめていた様子が残っている。

図5はノルウェーの女性であるがベストやベルト、ベルト飾り帯に彫金の飾りをかがり付けている。ヴァイキング時代より続いている彫金細工は北欧全域にわたって行われ、各々独自のすばらしい作品を作っている。そして衣服にとめ付けるメタルワークはインドやイラン、東欧を経て入ってきた技法である。

(ヘ) アップリケ

世界中でおこなわれている技法である。図6は北欧の女性の民族衣裳には欠かせない袋物に施されているアップリケである。黒や赤のフェルト地に赤、黄、緑などの鮮やかな色の布を色糸で留めている。ベストやスカート、クッションなど巾広く利用されている技法である。

(6) 編物 (knitting)

編物とは結び目 (knot) をつくると言う意味である。それより以前に木のつるや獣の皮を細く裂いてからめることにより (sprang), 布地がつくられていた。どちらの技法も織物より先に発生した技法といわれている。アラビア半島の遊牧民の靴下やサンダルが編物であった。また古代インカ帝国の布地の大半は編物といわれている。羊毛糸や皮革繊維が主な材料であったが7C頃から絹も使われている。3~4Cのコプトの遺跡からポピンと共に作品が発掘されて、ポピンレースが行われていたことがわかる。2本棒針を用いるようになったのはアラビアで7~8C頃であったが、13C

にイタリアで現在のスタイルの編物が始まった。

北欧においては6~11Cのヴァイキング時代に既に、骨針を用いて糸を編んでゆく単純なレース編が行われていた。それは現在でも特にノルウェーで盛んなスプラングの方法である。

14C末、パリやフィレンツェに手編職人のギルド (同業組合) が作られ、靴下、カーペット、タピストリー、ベッドカバーなど大きい物や服飾品も編物で作られるようになった。刺繍と同様に編物も上流社会の権威誇示の手段として数多く、複雑なものを作るようになった。14~15C、イギリスに技法が伝わり、靴下を編むことが主であったが、16CエリザベスI世が編物の国内生産を奨励した。16C後半、全ヨーロッパに編物生産が広まって農民も綿、麻、羊毛などで長靴下を用いるようになった。16C後半~19C半ばにかけて編物の機械化が進み、産業革命によって大量生産されるようになった。

北欧にも16C頃、西欧の編物技術が入ってきた。それまで獣皮などで作っていた靴下や上衣が編物で作られるようになった。そして常に輸出品の1つとして全家庭で靴下が編まれていた。

1872年、イギリスで編物を学校教育に取入れることとなった。前後して、手工芸運動で中世の盛んだった頃の技法やモチーフが再興され、伝承されることとなった。

編物も糸の組み方、柄の出し方などで種類も多く、地方色豊かであるが、本報では、北欧に伝えられた技法を主として取上げた。刺繍と同様に透かし模様のできる技法をレースとしてまとめた。毛糸による編物には長く寒い冬のために北欧だからこそ伝承されてきた技法をみることができる。

(イ) スプラング

図7に示したのがスプラングの技法である。織物や編物の中間をなす技術であり、前述の如く、ヴァイキング時代には北欧でも行われていた。糸を交差したりからめたりするが結ばない。①の技法でも理解できるように、設定する糸の長さに限度があるので、あまり大きい物は作れない。また糸の両端を留めていれば、真中で仕上りとなり鉤針で編んで仕上げをする。糸の片方を留めないでみると、大きい物が作れたり縁飾りにしたりすることができる。②のタピストリーは現代の作品である。

(ロ) レース

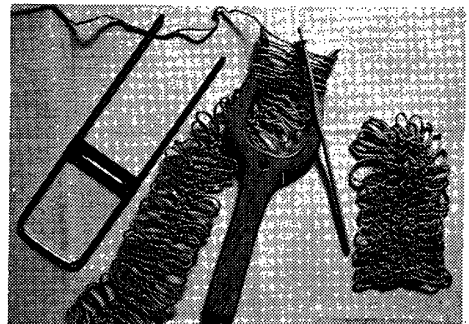
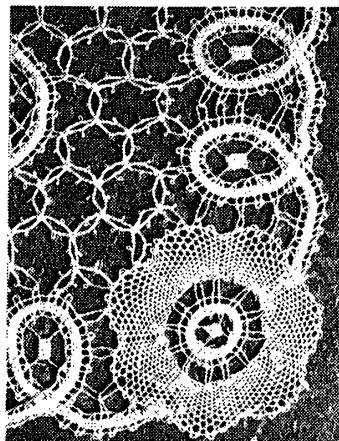
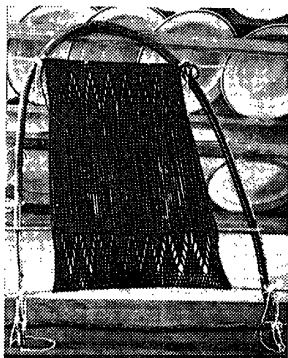
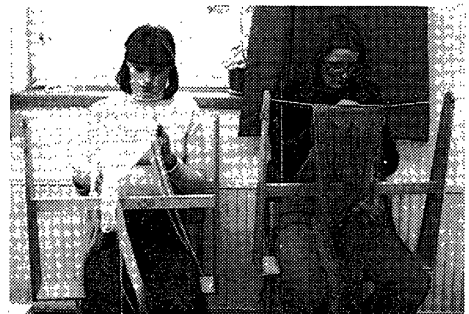
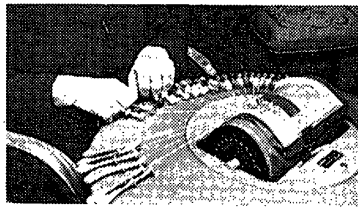
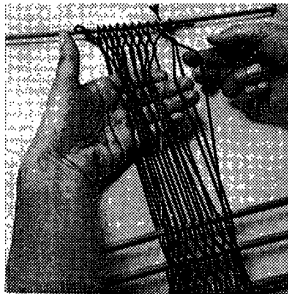
糸を絡めたり、結んだりして透しのできる編物をレースとして図8にまとめた。

3～4 Cに既にエジプトで行われていたボビンレースは、16Cにオランダやベルギーで盛んに作られ、その後、イギリスやスペインにひろまり、17C頃に北欧に入ってきた。各地で独自のモチーフが生み出されたが①の道具や技法は共通のものである。②の如く、アイボリー、白の麻や木綿の細い糸づかいによる繊細で華やかな作品ができるために貴族や教会でもてはやされた。北欧にもスウェーデンのダーラナなどに多くの優れた作品が残っている。

③のマクラメ編もよく知られている技法であるが、アラビア語で縁飾りという意味であった。基本技法は5種類の結び方（マクラメ結び、七宝結び、鎖結び、二重結び、止結び）であって、組合せたり間隔や糸の

色を変化させて工夫することにより、袋物、房飾り、タピストリーなどに作られる。7～8 C、アラビアで盛んであったのが十字軍によりイタリアに伝えられ、14Cにヨーロッパ全体に広まったが主として修道院で行われて教会用布の飾りとして用いられていた。

④は特別な用具を使った編み方である。最初は婦人のヘアピンを使ったのでヘアピン編の名がついている。左の金属製のものは現代の用具であるが、北欧では真中にあるような木製のものがよく使われる。ループの長さは2～8 cm 位で④の如く真中を鉤針で編んでゆき、リボン状のものを作る。その後、右端のようにリボン状の端のループをまた編んでゆくことにより幅広く連ねることができる。縁飾りやショール、テー



上①技法⁵⁾
下②タピストリー⁵⁾

上①ボビンレースの技法
下②ボビンレースのテーブル
センターの一部分

上③マクラメ編
(ラハティ大学・フィンランド)

下④ヘアピン編(麻糸とフォーク)

図7 スプラング

図8 レース

ブルクロスなどを作る。毛や麻の糸を使用することが多い。

(ハ) 編紐

編紐は図9-①の如く片方を固定しておき、他方で何本かに分けた糸を組んでゆく。日本の組紐の技法と同様である。三つ編、四つ編や平らになるもの、四角になるものがあり、色の変化で柄出しを楽しむことができる。編紐はボンネットの飾り結び紐に使用された。

(ニ) ニードルルーピング

図10に示したニードルルーピングは実に巧みに考案された技法である。ヴァイキング時代に既に使用されており、西南ヨーロッパでは中世頃までよく行われていたが、北欧にのみ伝承されてきた技法である。①②③のように毛や麻糸で輪を作り、銅製の8 cm 位の針でその輪を縫うように1目ずつ拾ってゆく技法である。地厚で解け難いので、防寒用や摩擦のはげしい靴下のカバーに利用されることが多い。③はニードルルーピングによる帽子とミトンである。

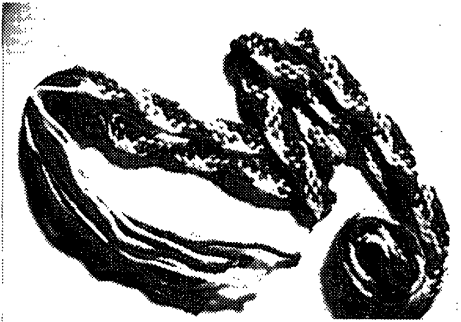
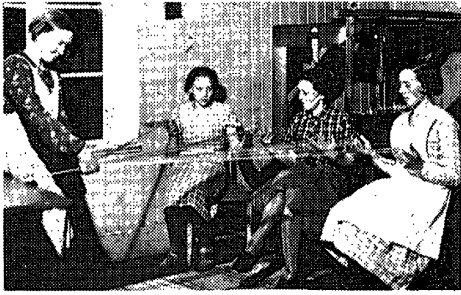
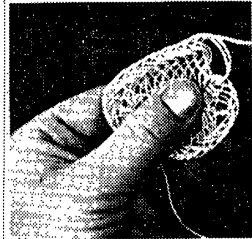
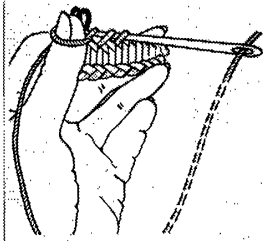
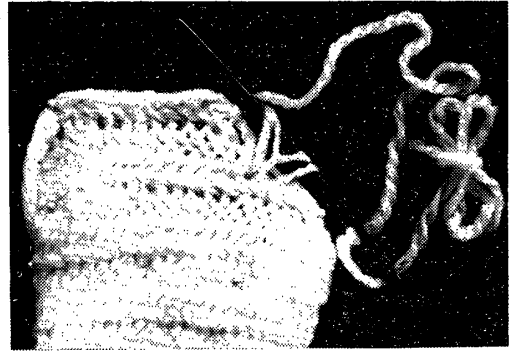


図9 編紐 上①技法³⁾
下②白と茶の糸による編紐



上①技法⁶⁾
図10 ニードル
ルーピング



上②銅製の針
下③帽子とミトン⁶⁾

(ホ) 鉤針編

鉤針編について図11にまとめた。糸の種類、太さ、色を変化させて種々の作品や柄出しができる大変ポピュラーな技法である。①に示した技法は古い技法である。2目を1度に拾ってゆくので②の如き地厚のものができる。北欧では今もこの方法でミドンを作ることが多い。鉤針編のもう1つの特徴として、沢山のモチーフを作って、それを繋ぐことにより様々の変化を楽

しむことができる。③はその一例である。

(ヘ) 棒針編

2本以上の棒針による編物を図12にまとめた。7～8C頃、2本棒針がアラビアで用いられていた記録があるが、現在のような編物の技法はイタリアで発展したといわれている。①の靴下は真直ぐ筒状に形づくっただけのものだが、編靴下の襠が入らない初期の形と共通している。②の手袋やミトンは手首の所を長く編

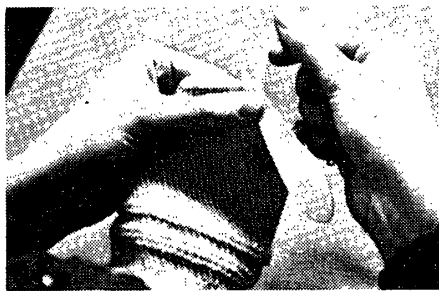
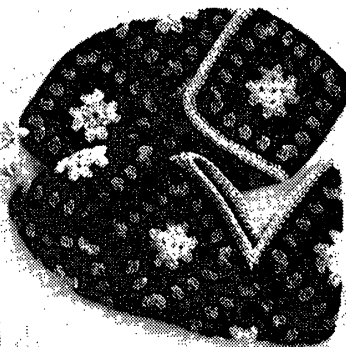
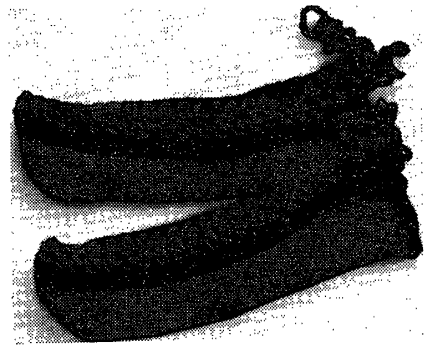


図11 鉤針編 上①技法
下②ミトン



③ 鉤針編のモチーフつなぎによる靴下カバー



右上①靴下
右下②手袋と
子供用ミトン

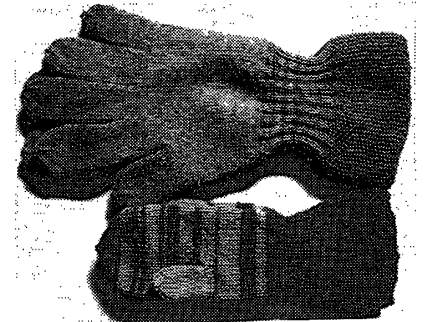
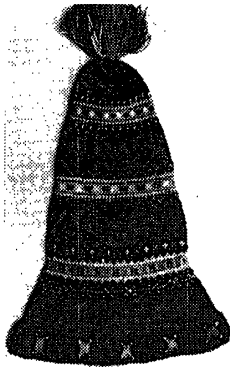


図12 棒針編

んで暖かくしている。図11—②のミトンも同様だが、北欧では防寒の工夫がいろいろされていて作る人の親切さが伝わってくる物が多い。③④⑤に色糸による柄を編み出した例を示した。③はノルウェー南部セテスダルの帽子である。帽子は防寒のため真深に被れるように深くなっていたり、耳の所を編み出して耳が隠れるよう形の上でも暖かく過せる工夫がされている。④の男性は北欧の手工芸の1つであるカゴ編をしている。



上③編込み柄のある帽子

下④編込み柄のあるセーター



⑤ 男性用靴下³⁾



⑥ 現代感覚の柄のセーター

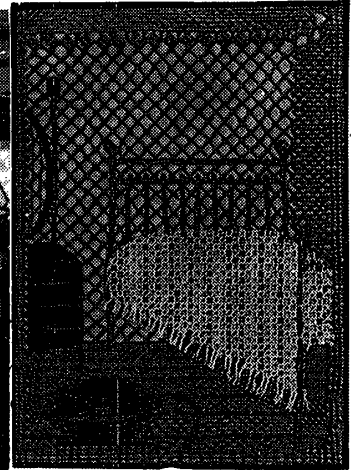


図13 レース編の技法によるタピストリー(現代)

る。着用している編込みセーターの黒い部分は羊毛の焦茶や黒い毛をそのまま使用している。これはフィンランドやアイスランド、アイルランドなどに多い柄である。⑤は男性用の靴下である。柄のはっきりしている左は、やはり羊毛の自然の色の組合せである。真中は濃紫と赤紫の色糸による横段模様である。右の白のは花婿用である。編込み柄は柄の所で2色以上の色糸が重なるので地厚となり暖かいため、北欧各地やスコットランドなど寒い所では欠かせないものである。また、羊毛の油脂分を除去せず編まれたセーターは防水性にも優れているので、漁業や林業など屋外の作業にも手放せないものである。伝統的な編込み柄には地方色豊かで種類も多いのであるが紙面の都合で割愛した。⑥は編込み柄を現代感覚に表現したセーターであ

る。配色と柄のバランス、糸の種類の豊富さに長い伝統に支えられた安定と斬新さを見ることが出来る。

図13は編物の技法が衣服や装飾品的一部分にとどまらず、インテリアに応用された例である。35×60cmの大きさの麻製タピストリー。スウェーデンのスティマ・ハッセベルグの作品である。

西欧では刺繍や編物、レースは手の込んだ装飾品として宝石に匹敵する価値を持ち、上流階級や教会が権威を誇示するためにその技法を独占したり、作品を蒐集してその数を競った。刺繍や編物が専門職人の手に

よって生み出されていった。しかし社会の変動により、その権威が失墜すると装飾的役割をしていた刺繍や編物は衰退してしまい、19~20C初の再興運動により、保護、伝承されることができた。

しかし北欧においては少し状況が異なっていた。勿論、刺繍や編物が上流階級や教会の権威の象徴ともなっていた。しかしそれよりも、手近に生産できる麻、羊毛を利用し各家庭で織物、編物、刺繍その他の作品に作り上げられて他の西欧諸国へ輸出した。そのことにより、国家財政の大きい収入源の一翼を担っていたのである。テキスタイルの生産が専門職人でなく、一般家庭に委ねられていた。更に、産業革命の影響が少

なかったので手工芸の急速な機械化がなかった。材料が安価で豊富になった時ますます手工芸が隆盛をきわめ、技術もデザインもほとんどそのまま現在に伝えられてきたのである。

参考文献

- 1) 堀田延子：平安女学院短大紀要，北欧の TEXTILE と COSTUME (1)(2)(3)(4)(5)(6)，8，75～83 (1977)，9，60～66 (1978)，10，88～95 (1979)，11，88～95 (1980)，12，81～90 (1981)，13，

59～64 (1982)

- 2) Janice S. Stewart : The folk arts of Norway
Dover U.S.A. 185～202 (1972)
- 3) Anna-Maja Nylén : Hemslöjd Håkan Ohlssons
Sweden 202～338 (1975)
- 4) 尾上雅野：欧風刺繍 婦人画報社 東京 60～65 (1976)
- 5) Tine Abrahamsson : Sprang Borgen Norway
5～15 (1975)
- 6) Märta Broden : Nålbinding LTs förlag
Sweden 30～42 (1974)